に祝ひて喰ふことは、唐山にも似たる事侍り、月令廣義曰、餛飩、俗名匾食、燕都元旦晨起、當家者率妻孥、羅拜天地祖禰、作匾食奉長上、爲壽、以次交相酬賀といへり、遵生八牋、花紅餅方、用手壓匾とあれば、匾食はおしひらめたる食なり、又熙朝樂事曰、正月朔日、民間設奠於祠堂、次拜家長、爲椒栢之酒、以待親戚隣里、以春餅爲上供、とも見ゆ、是も月令廣義に、春餅者薄劑、煿菜肉裹食也といへるによれば、邦俗のいはゆるもちゐとは格別のたがひ也、○略中又案ずるに、蚩尤が肉にたとへて餅をくふといふ事、いまだより所を得はべらず、識者の教をまちて補ふべし、

〔世諺問答〕正月　問て云、同日○元日齒固といひて、餅ゐかゞみにむかふ事は、いかなることぞや、答、○略中もちゐは近江國の火切のもちを用ひ侍るべき事なり、さて正月のかゞみにしてもちひむかふ時は、古今集に入たる、　あふみのやかゞみの山をたてたればかねてぞみゆる君が千年は、といふ歌を誦するなり、このうたは、延喜の御門の御時、近江の國より大嘗會の御べたてまつりし時、大伴の黒主がよめる歌なり、源氏初音の卷にも、此歌の詞をひきてかける也、

〔内院年中行事〕正月御かゞみの時の歌

けふよりは我をもちゐのますかゞみ嬉しきことをうつしてぞみる

いのち長くつかさくらゐをますかゞみ年のはじめに見るぞ嬉しき

天つちをふくろにぬひてさいはひを入てもたればおもふことなし

右の歌、三返よむべし、

〔日次紀事一正月〕十一日　武家具足鏡餅開凡鎧有二六具一、悉具足之謂也、其所レ供二具足之餅一、特以レ刀忌レ截レ之、故以二手或槌一破レ之缺レ之而賞レ之是謂二鏡開一、世所レ謂缺レ餅之名、又起レ自二此餅一、

○按ズルニ、鏡餅ヲ開ク事ハ、年始雜載篇鏡開條ニ詳ナリ、

〔塵袋九〕年始賞餅事